

(2) - 3) ②花野再生と特産品・観光活用の試み

(なみの高原やすらぎ交流館・阿蘇花野協会、阿蘇草原再生協議会など)

阿蘇の草原再生活動を軸にしながら、グリーンツーリズムやエコツーリズムへの活用や農業、林業、畜産、食育など里地里山の多様な地域文化の活用が図られている。

a. 取組の背景と経緯

阿蘇の草原は多様な植物の世界であり、「花野」として古くは万葉の昔から歌に詠まれている景観が広がっている。大陸性遺存植物も多く、阿蘇にだけ存在する希少種も確認されている。その一方で、農業の機械化や化学肥料の普及、畜産業の低迷などが相まって、採草地としての草原利用の意義が低下してしまったことから、放棄地や植林地への転換が進んでおり、消失の危機にある。

草原の消失によって阿蘇の多様な植生が失われることに危機感を抱いた市民団体「阿蘇花野協会」では、花野再生と多様な植物を未来に引き継ぐための草刈りや野焼き等の保全活動をスタートさせている。また、なみの高原やすらぎ交流館では、草原再生活動とタイアップして交流面からアプローチしながら地域活性化を図っている。

b. 活用方法

■ 草原資源を観察会など環境教育への利用

保全活動と合わせた草花の観察会などの楽しいイベントや茶草（草原の植物を利用したお茶）への活用を試みるなど、草原資源の新たな利用を図っている。



写真：阿蘇野の花観察会の様子（2010年度環境省里なび研修会資料より）

■ グリーンツーリズム・エコツーリズムと多様な地域資源活用

観光ルートとして知名度を上げており、観光野焼きが実施されている。また、やすらぎ交流館では、草原を中心テーマに据えながら、農業体験、食育体験、林業体験、畜産体験など近隣の地域の多様な自然文化を体験し楽しめるエコツーリズム・グリーンツーリズムプログラムを設定しており、地域の総合的な資源の利活用を図っている。



写真：やすらぎ交流館による草原周辺の地域産業を活かしたエコツアー
(2010年度里なび研修会資料より)

c. 保全活動と野生生物への効果

外部の協力者を得ながら継続的な保全活動が行われた結果、見られなくなっていたヒメユリをはじめ様々な植物が戻ってくる傾向がある。かつての景観が再生される様子に地元からも評価が高まっている。

草原の維持管理のためには地域にかかわりながら草原に携わる人材が不可欠であるが、草原をテーマにした交流活動は子どもたちの環境教育だけに留まらず、様々な市民団体や企業なども巻き込みつつある。観光面での知名度の向上と相まって、地域の農林漁業などの生業の活性化と一体となった保全に向けた取組が活発化しつつある。



写真：保全活動の結果十数年ぶりによみがえった阿蘇のヒメユリの群生
(2010年度里なび研修会資料より)